

音声英語の理論と実践

Spoken English: Theory and Practice

杉 森 幹 彦・中 西 義 子
杉 森 直 樹・清 水 裕 子
共 著

THIS SIGN OF



A GOOD BOOK

THE EIHŌSHA LTD.

—Tokyo—

まえがき

世界は今や急速に国際化・情報化が進み、通信メディアの発達と普及により、世界中の人々とリアルタイムで情報交換が行える時代になってきた。そして英語を母語・第二言語・外国語など何らかの形で用いている人の数は、10億とも15億ともいわれており、英語はあらゆる分野において用いられる世界の共通語になってきたといっても過言ではない。

私たちの日常生活におけるコミュニケーションの方法は、主として文字を媒体とする場合と、音声を媒体とする場合とがあるが、音声によるコミュニケーションは、文字に比べると個人差や地域差が遥かに大きい。さらに、母語と外国語とでは、それぞれの言語がもつ音声学上の特徴が一層大きく異なっており、相互理解が難しくなるのである。このような社会の情勢を踏まえて、最近の英語教育においては、音声英語の特徴や正しい発音要領の学習に重点を置き、音声英語による実用的なコミュニケーション能力の育成が重要視されるようになってきた。

音声によるコミュニケーション能力を構成する要素にはいろいろあるが、発音能力はその中でも最も表面にあり、感情や思考内容を正確に伝達するために必要な能力である。いくらネイティブスピーカーのように優れた英文を作れる人であっても、発音が悪ければ相手に自分の意志をスムーズに伝達することができないのである。従って、流暢な英語の発音を身につけることは、コミュニケーション能力を高めるための一つの重要な手段となるのである。

本書は大学・短大において、英語音声学・英語音韻論・英語発音学などを学ぶ大学生をはじめ、発音指導を行う英語科教員を主な対象として、日本語の音声と比較しながら英語音声学の基本的学習項目と、実際のコミュニケーションにおいて発生する様々な音声現象とを詳しく解説したものである。

さらに実際のコミュニケーションの場で役立つ例文と、発音練習のための Exercise が豊富に用意されているので、理論の学習だけに終わらず、正しいリズムとアクセントを付け、場面や状況に相応しいイントネーションで音声による豊かな表現力を養成するために活用してほしい。例文は学生たちに身近な内容で、関心のあるトピックを多く集めたつもりである。

本書は最近、世界共通語として広く用いられているアメリカ英語の発音を中心に、次の六つの章から構成されている。第1章では「言語とコミュニケーション」と題して、音声言語とコミュニケーションおよびその研究分野などについて述べているので、音声英語の学習を始めるための予備知識として読んでほしい。

第2章では「英語の音」と題して、子音と母音の発音について解説している。音声学の参考文献やテキストでは、母音を先に扱っているものが多いが、本書では子音を先に扱う。その理由は、英語では母音1に対して子音2の割合で子音が多く現れることと、日本人の多くは日本語にない子音の発音や、破裂音・摩擦音・破擦音などの発音が弱いために、明確に意図が伝達されない場合が起こりやすいからである。単語の発音練習から始め、次にその単語を含んだ句や文の発音練習を行うことが大切である。個々の音の発音は、文レベルの発話になるといろいろと変化するものであり、さらに文のリズムやイントネーションなどは、個々の単語の発音以上に重要な働きをするからである。

第3章では「英語のアクセントとリズム」と題して、語・句・文の強勢について解説し、それぞれの発音と文脈的な意味との関連を論じている。これは実際のコミュニケーションで最も重要な部分である。日本語のリズムと大きく違うため最初は戸惑いを感じるかもしれないが、これが発音を英語らしくするための重要なポイントとなるのである。

第4章では「英語の音声変化」と題して、音の連結・同化・脱落現象について詳しく解説している。文字で見れば簡単なことばでも、実際の発音を聞くと何と何といっているのか分からないことがよくあるが、それは英語のリズムやこの音声変化による場合が多いのである。

第5章では「英語のイントネーション」と題して、イントネーションの役割、イントネーションの型とその表す意味などを解説している。第3章以降は実際のコミュニケーションで最も重要な部分であるので、テープの発音をモデルとして、場面と状況に応じて、意識しなくても正しい発音ができるところまで徹底的に反復練習することが望ましい。

第6章は「世界の英語」と題して、世界の各地で話されている多様な英語について、入手できる範囲内で情報を集め、発音上の特徴と文法や用法・語彙の特殊性を紹介している。

英語の発音を上達させるためには、モデルとなる発音をよく聞き、そのモデルに従って多くの英文を何度も実際に声に出して発音することが必要である。さらに高度な練習としては、英語のテレビニュースや映画の画面に出る英語のキャプションを活用し、画面に合わせて自分でキャプションの英語を音読する方法がある。その際、ネイティブスピーカーの発音と自分の発音の両方をテープに録音し、後で両者の発音を比較すれば、一層効果的な発音練習を自分で行うことができる。

英語の音声に関する知識と発音能力は、ただ発音を上達させるためだけではなく、リスニング能力の養成にも必要なものである。例えば、この音はこのような場合には弱く発音されたり、全く聞こえなくなったり、続いたり崩れたりして発音されることを予め知っていれば、聞き取りの際に大いに役立つものである。

本書には、随所に「英語発音のポイント」と「資料」が囲み記事として掲載されているので、関連情報として活用してほしい。特に外来語として日本語に入っているカタカナことばの発音には、特に注意したい。

本書の発行に際しては、企画から校正、索引の作成に至るまで、英宝社出版部の方々にご助言とご協力をいただいた。ここに著者一同、心から感謝の意を表する次第である。

1996年11月

著者

目 次

第1章 言語とコミュニケーション

1. 世界の言語	3
2. 音声言語の研究分野	5
2.1 音声学とは	5
2.2 音声の伝達経路	5
2.3 音声学の三つの分野	7
2.4 音素と異音	8
2.5 音声学と音韻論(音素論)	9
2.6 音声表記	9
3. コミュニケーション	11
4. 音声言語と文字言語	12
5. 言語とメディア	13

第2章 英語の音

1. 英語音の種類	15
1.1 有声音と無声音	15
1.2 子音と母音	16
1.3 子音	18
1.3.1 閉鎖音	18
1.3.2 摩擦音	23
1.3.3 破擦音	31

1.3.4	鼻音	33
1.3.5	側音	37
1.3.6	半母音	38
1.4	母音	43
1.4.1	前母音	44
1.4.2	中央母音	48
1.4.3	後母音	51
1.4.4	二重母音	57
1.4.5	三重母音	65
2.	音節の構造	66
2.1	音節の構造	66
2.2	分節法	68
2.3	子音連結	71
第3章 英語のアクセントとリズム		
1.	英語のアクセントの特徴	75
2.	語強勢	75
2.1	単音節語(1音節語)の強勢	75
2.2	2音節語の強勢	76
2.3	多音節語の強勢	76
2.4	強勢の位置の変化	77
2.4.1	強勢の位置により品詞が異なる語	77
2.4.2	意味の違いにより強勢の位置が変わる語	78
2.5	派生語・屈折語の強勢	79
2.5.1	派生語の場合	79
2.5.2	屈折語の場合	80
3.	複合名詞と句強勢	81
3.1	複合名詞の強勢	81

3.2 句の強勢	81
3.2.1 修飾語+名詞	81
3.2.2 動詞+副詞	82
3.3 対照強勢	82
4. 文強勢	83
4.1 内容語と機能語	83
4.2 機能語の弱形と強形	84
4.3 機能語の発音	84
4.3.1 弱形	88
4.3.2 強形の発生する環境	89
5. 短縮形	91
5.1 be 助動詞・助動詞の短縮形	92
5.2 not の短縮形	94
6. 英語のリズム	95

第4章 英語の音声変化

1. 連結現象	101
1.1 r-連結	101
1.2 n-連結	101
1.3 その他の連結	102
2. 同化現象	103
2.1 確立同化	104
2.1.1 名詞の規則複数形を表わす -(e)s	104
2.1.2 動詞の三単現を表わす -(e)s	104
2.1.3 動詞の規則変化を表わす -(e)d	104
2.1.4 その他の確立同化	105
2.2 偶発同化	106
2.2.1 /t, d, s, z/ + /j/ の場合	106

2.2.2	動詞(助動詞) + to の変化	106
2.2.3	/l/ の弾音化	108
2.2.4	鼻音化現象	108
3.	脱落現象	109
3.1	母音の脱落	109
3.2	子音の脱落	109
第5章 英語のイントネーション		
1.	イントネーションの役割	113
2.	声の高低の区分	114
3.	イントネーションの表記法	115
4.	末尾接続	116
5.	イントネーションの型とその意味	117
5.1	下降調	117
5.2	上昇調	118
5.3	水平調	119
6.	文の種類とイントネーション	120
6.1	付加疑問文	120
6.2	選択疑問文	120
6.3	祈願文	121
6.4	挿入句	121
6.5	重文	122
6.6	複文	122
7.	イントネーションの主な機能	123
7.1	文のアクセント	123
7.2	文の種類	123
7.3	話者の心理・会話の状況	124

第6章 世界の英語

1. 世界の英語	129
2. アメリカ英語とイギリス英語	129
3. オーストラリア・ニュージーランド英語	135
4. カナダ英語	136
5. 第二言語として用いられている英語	137
6. 黒人英語	137
7. ピジンとクレオール	138
参考文献	141
索 引	144

(1) 英語発音のポイント内容一覧表

ポイント (1)	帯気音	22
ポイント (2)	破裂を伴わない閉鎖音	23
ポイント (3)	/b/ の発音と /v/ の発音	24
ポイント (4)	/θ/ の発音と /s/ の発音	26
ポイント (5)	/ʃ/ の発音と /z/ の発音	29
ポイント (6)	日本語の「ハ行音」と英語の /h/, /f/	30
ポイント (7)	日本語の「チ」, 「ツ」と英語の /t/, /tʃ/	33
ポイント (8)	「明るい 1」と「暗い 1」	37
ポイント (9)	/r/ の発音 (米英の違い)	40
ポイント (10)	日本語の「ラ行音」と英語の /r/, /l/	42
ポイント (11)	「ア」に聞こえる音	56
ポイント (12)	「アー」に聞こえる音	57
ポイント (13)	「オー」に聞こえる音	61
ポイント (14)	外来語に注意 (1)	63
ポイント (15)	外来語に注意 (2)	72

(2) 図・表内容一覧表

図 1	インド・ヨーロッパ語族系統図	4
図 2	話しことばの伝達経路	6
図 3	話しことばの伝達経路と音声学の対象分野	7
図 4	声帯の開閉状態と音の種類	15
図 5	発音器官図	16
図 6	上向き二重母音	58
図 7	中向き二重母音	61
図 8	yesterday の音声波形	66
図 9	Ladefoged による英語音の相対的聞こえ度	67
図 10	英語の強勢リズム	96

図 11	日本語の音節リズム	96
図 12	アメリカ英語の方言	130
表 1	国際音声記号 (IPA)	10
表 2	基本的形態における音声言語と文字言語の比較	13
表 3	本書で用いられる発音記号一覧表	17
表 4	英語の子音分類表	18
表 5	英語の母音分類表	43
表 6	単音節語の子音連結	71
表 7	be 動詞・助動詞の短縮形	92
表 8	not の短縮形	94
表 9	アメリカ英語とイギリス英語の発音上の相違点	130

(3) 資料内容一覧表

資料 1	アメリカ英語とイギリス英語の発音・ アクセント以外の相違点	132
資料 2	オーストラリア・ニュージーランド英語特有の語彙	135
資料 3	カナダ英語特有の語彙	136
資料 4	黒人英語特有の用法	138
資料 5	ピジンとクレオール特有の語彙と文法	139

音声英語の理論と実践

第 1 章 言語とコミュニケーション

1. 世界の言語

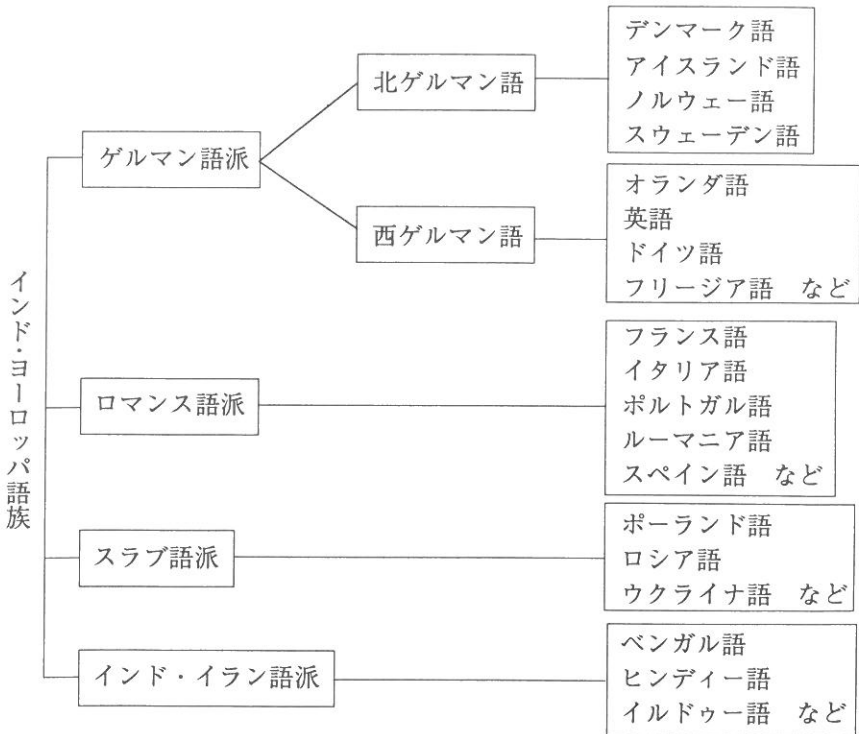
世界には一体いくつの言語があるのか、その正確な数を示すことは難しい。その理由は、「何を言語とするのか」ということで数字が変わってくるからである。例えば、ある言語と方言の境界がはっきりしない場合や、かつてはその言語を母語とする人々がいたのに、現在では母語話者がいなくなった場合などは、何をもって一つの言語とみなすかが問題になってくる。一般には、現在 3,000 以上の言語が話されているとされているが、人口と言語の関係から見ると、約 15 種類の主要な言語が世界の人口の 2 分の 1 によって話されていることになる。

日本で学習されている外国語としては、英語、フランス語、ドイツ語、中国語などが上位を占めているが、世界的に見ると、母語として最も多くの人々に話されているのは中国語であり、その話者はおよそ 12 億人といわれている。中国語に次いで母語話者が多いのが英語である。英語を母語として使用している人々の数は約 3.5 億人以上で、第二言語や外国語として話す人々を含めると 7 億人以上にもなるといわれている。また、国の数から見ると、英語を母語や第二言語や公用語の一つとしている国は 60 カ国以上もあり、何らかの英語の知識をもつ人は、世界で実に 15 億人もいることになる。

世界の言語は、それぞれ密接な関連をもち、同じ源から分岐したと考えられる言語同士をグループ（語族）にまとめる形で分類されている。その分類によると、世界の言語にはインド・ヨーロッパ語族、アルタイ語族、シナ・チベット語族、マレー・ポリネシア語族、アフロ・アジア語族、アルタイック語族など 12 の語族があり、日本語は韓国語と共にアルタイック語族に属している。英語は、図 1 に示すように、インド・ヨーロッパ語族に属しているが、インド・ヨーロッパ語族はさらに、ゲルマン語派、ロマンス語派、ス

ラブ語派、インド・イラン語派、ギリシャ語派など八つの語派に分類されている。英語はインド・ヨーロッパ語族の中では、ドイツ語やオランダ語と共にゲルマン語派に属しているが、語彙の上でも、同じ語派の間では共通点が多いようである。フランス語やイタリア語などは、英語とは別のロマンス語派に属しているが、英語の語彙や音韻に与えた影響を考えると、これらの言語は多くの類似点をもっているといえる。特に、1066年のノルマン征服により、フランス語が英国の支配階級のことばとなった史実があり、現在の英語の語彙の約27%がアングロサクソン系の英語であるのに対し、フランス語ないしラテン語系は50%以上になっている。

図1 インド・ヨーロッパ語族系統図



2 音声言語の研究分野

人間が情報を伝達するために用いる最も基本的で代表的な手段は言語である。感情や意思は身振りや顔の表情などで表現することも可能であるが、それには限界があり、われわれが社会生活を円滑に行うために必要なコミュニケーションの手段としては、やはり言語が最も重要である。

コミュニケーションには、言語を音声によって表現し、それを聞いて理解する方法と、言語を文字によって表現し、それを読んで理解する方法とがあるが、人間の最も基本的で能率的なコミュニケーションの手段は音声言語であろう。人間の言語の中には、まだ文字をもたないものもあるが、いかなる言語でも音声をもたないものはないのである。

今日では、通信工学の著しい発達に伴い、音声による情報交換を即時に世界中の人々とリアルタイムで行うことが可能となり、言語としての音声の研究と学習が一層重要となってきた。

2.1 音声学とは

人間が感情や意思を表明したり、情報を伝達するために発する声のことを、「言語音」(speech sound) または単に「音声」(speech) という。音声が発音器官によってどのように作り出されるのか、音声はどのような性質をもっているのか、そして話者の発した音声はどのようにして聴者に伝わり、その意味が理解されるのか、などについて物理的・科学的に分析し、研究する学問分野のことを「音声学」(Phonetics) という。世界の諸言語の音声に共通する普遍性を研究する一般音声学に対して、英語の音声を研究対象とする音声学を「英語音声学」(English Phonetics) という。

2.2 音声の伝達経路

人と人が音声を用いてコミュニケーションを行う場合のプロセスを考えてみよう。まず第一に、話者が自分の感情や思想内容を脳の中で概念化 (conceptualize) し、それを話者の修得した言語形式によって記号化 (encode) する過程がある。次に、それが複雑な刺激となって運動神経を通して発音器官

を作動させ、それによって発生する微妙な振動が共鳴 (resonance) を起こし、話者の周辺の空気に伝わり、その空気振動が音波 (sound wave) として聴者の聴覚器官に伝達されると、それが音声として知覚されることになる。その音波が聴覚神経に複雑な刺激を与え、それが言語として解読 (decode) されることによって、言語としての意味を認識することになり、話者の送った言語内容を理解することができると考えられている。

このような話者と聴者を結んでいる伝達のプロセスを、Denes and Pinson (1993) では “The Speech Chain” (話しことばの鎖) と呼んでいる。

図 2 話しことばの伝達経路

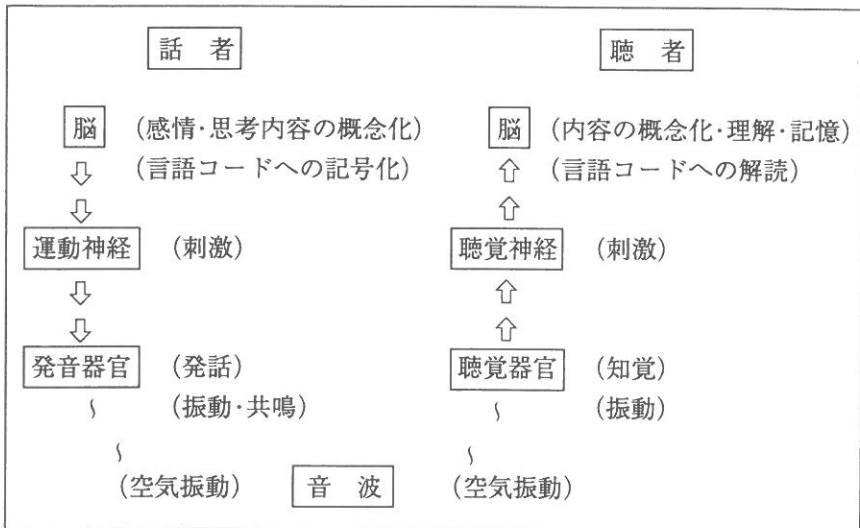
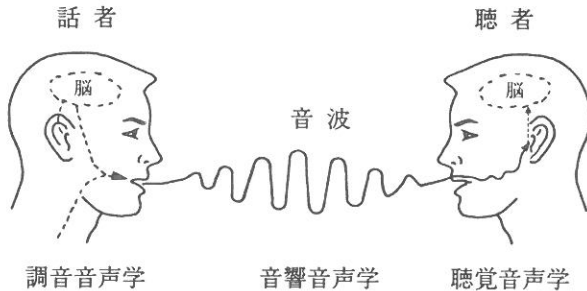


図3 話しことばの伝達経路と音声学の対象分野



2.3 音声学の三つの分野

音声学ではこのような伝達のプロセスを、調音・音響・聴覚の三つの分野に分類して研究の対象としている。

音声学では認識できるあらゆる言語音を研究対象としているが、話者の発音器官によって個々の言語音がいかに生成されるのかについて研究するのが「調音音声学」(Articulatory Phonetics)である。話者が言語音を発音する際、発音器官のどこをどのように動かせば正しい音が生成されるのか、すなわち、個々の言語音の調音の仕方を、発音器官の機能・形状変化・呼気の流出などの観点から研究する学問である。さらに、個々の音声を分類し、それを記述する方法や発音記号の研究なども行われている。

次に、話者の発音器官によって生成された音声は、音波 (sound wave) として空中を飛び交う音響的段階に入るが、この音波としての音響的特性をいろいろな音声分析機器を用いて物理的に測定し、分析する研究分野を「音響音声学」(Acoustic Phonetics)という。サウンドスペクトログラフ (sound spectrograph) などの測定機器を用いて、母音の音色を特徴づけるフォルマント (formant) や、音の長さ・高さ・強さなど韻律的要素 (prosodies) の分析が行われ、調音器官の動きや形状変化が観察されてきた。最近では、コンピュータなどを用いて音声スペクトル・基本周波数・インテンシティーなどの分析や、発話メカニズムの解明、犯罪捜査における声紋分析、音声認識、合成音

声の生成の研究なども行われている。

第三番目として、音波が聴者の耳に達すると、それがいかにして知覚され、聴覚器官を通してことばとして認識されるのかを研究する分野があり、これを「聴覚音声学」(Auditory Phonetics)または「知覚音声学」(Perceptual Phonetics)という。

2.4 音素と異音

一つの言語音でも、それが実際に発音される場合は、いろいろな音声上の環境や状況によって微妙に変化しているのであるが、音声的類似性 (phonetic similarity) によって分類された理論上の一つの音の単位のことを「音素」(phoneme) という。例えば、peace, speed, napkin, tip の四つの単語の中に現れる [p] の発音について考えて見よう。この音は音声学ではすべて両唇閉鎖 (破裂) 音として分類されているが、それぞれの発音は、氣息音 (aspirate) [p^h] を伴う場合と伴わない場合とがあり、厳密にいえば全く同一の音とはいえないのである。peace の [p] は語頭にあり、両唇を閉じることによってせき止められた呼気を一気に破裂させて発音するため、強い氣息音を伴う音となる。しかし、speed の [p] は [s] という摩擦音の直後に現れるため、破裂音であっても氣息音は伴わずに発音される。また、napkin 中の [p] は破裂そのものを起こさない方法で発音され、[tip] の [p] は語末であるので、この語で発話が終了するような場合は破裂を起こさず、従って氣息音も伴わずに発音される。

これら四つの [p] はそれぞれ音質が微細に異なっているため、音声学の精密な表記法では、氣息音を伴う場合は [p^h]、伴わない場合は [p]、そして破裂を起こさない場合は [p⁻] と表記される。しかし、英語では、このように微細な音質の違いによってことばの意味の違いをもたらすことは起こらないので、これらを一括して一つの音の単位として扱い、この単位のことを音素といっている。そして一つの音素にまとめられる個々の音、例えば上記の [p^h] [p] [p⁻] をその音素の「異音」(allophone) という。

一般に、音素を表記する場合は音素記号 (phonemic symbol) / / を、異音を表記する場合は音声記号 (phonetic symbol) [] を使用することになっている。

2.5 音声学と音韻論 (音素論)

人間の言語音の調音や知覚, そして音声そのものの特質などを物理的および生理学的に研究するのが音声学であるが, 言語音を全体として体系的にまとめ, 音同士の相互関係や, 言語の構造と意味機能との関係などを研究するのが音韻論 (Phonology) または音素論 (Phonemics) である. 音声学と音韻論とは相互に密接な関連があり, どちらも言語の音声面を研究するのに必要な分野であるため, 本書では音韻論の理論にも触れながら, 調音音声学の立場から解説する.

2.6 音声表記

一つの言語音を詳細に観察し, それを表記するために用いられる記号を「音声記号」(phonetic symbol) といい, 意味を弁別する上での音声上の最小単位である音素を表記するために用いられる記号を「音素記号」(phonemic symbol) という.

言語音を表記する際, 意味の弁別に必要な記号だけを用いる方式を「簡略表記」(broad transcription) という. これに対して, 音声学的に見て, 多少でも違いがあれば, その違いを詳細に表するために記号を区別して用いる方式を「精密表記」(narrow transcription) という.

音声学の研究については, 世界のどの言語についてもそれぞれの言語音を共通の記号で表記できる音声記号が必要であるが, 1886年に国際音声学協会 (the International Phonetic Association), 略して IPA が創立され, 1888年には, アルファベット文字を基礎にした国際音声記号 (the International Phonetic Alphabet), 略して IPA が制定された. しかし, 世界に存在するすべての言語音を正確に表するのに, 26個のアルファベット文字だけではとても間に合わないので, [ɛ] [ʌ] [ɔ] [ɔ̃] [θ] [ð] [ɸ] などの補足記号が用いられるようになった.

1993年に改訂された国際音声記号(IPA)は表1の通りである。

表1 国際音声記号(IPA)

THE INTERNATIONAL PHONETIC ALPHABET (revised to 1993)

CONSONANTS (PULMONIC)

	Bilabial	Labiodental	Dental	Alveolar	Postalveolar	Retroflex	Palatal	Velar	Uvular	Pharyngeal	Glottal
Plosive	p b			t d		ʈ ɖ	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ
Nasal	m	ɱ		n		ɳ	ɲ	ŋ	ɴ		
Trill				ʀ					ʀ		
Tap or Flap				ɾ		ɽ					
Fricative	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
Lateral fricative				ɬ ɮ							
Approximant		ʋ		ɹ		ɻ	j	ɰ			
Lateral approximant				l		ɭ	ʎ	ʟ			

Where symbols appear in pairs, the one to the right represents a voiced consonant. Shaded areas denote articulations judged impossible.

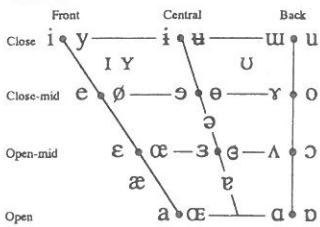
CONSONANTS (NON-PULMONIC)

Clicks	Voiced implosives	Ejectives
◌ Bilabial	ɓ Bilabial	as in:
Dental	ɗ Dental/alveolar	ɓ' Bilabial
! (Post)alveolar	ɟ Palatal	ɗ' Dental/alveolar
‡ Palatoalveolar	ɠ Velar	ɟ' Velar
Alveolar lateral	ɣ Uvular	ɠ' Alveolar fricative

SUPRASEGMENTALS

	TONES & WORD ACCENTS
ˈ Primary stress	ˈ founə'tɪʃən
ˌ Secondary stress	ˌ
ː Long	eː
ˑ Half-long	eˑ
ˑ Extra-short	e̘
· Syllable break	ɪ.ækt
ˌ Minor (foot) group	ˌ
Major (intonation) group	
˘ Linking (absence of a break)	˘
	LEVEL
	˥ Extra high
	˦ High
	˧ Mid
	˨ Low
	˩ Extra low
	↓ Downstep
	↑ Upstep
	CONTOUR
	˥ or ˦ Rising
	˧ or ˨ Falling
	˩ High rising
	˨ Low rising
	˩ Rising-falling
	↗ Global rise etc
	↘ Global fall

VOWELS



Where symbols appear in pairs, the one to the right represents a rounded vowel.

OTHER SYMBOLS

ʌ Voiceless labial-velar fricative	ɕ ʑ Alveolo-palatal fricatives
ʋ Voiced labial-velar approximant	ɭ Alveolar lateral flap
ɰ Voiced labial-palatal approximant	ɥ Simultaneous ʃ and x
ħ Voiceless epiglottal fricative	Affricates and double articulations can be represented by two symbols joined by a tie bar if necessary.
ʕ Voiced epiglottal fricative	
ʡ Epiglottal plosive	kp ts

DIACRITICS

Diacritics may be placed above a symbol with a descender, e.g. ɲ̥

◌ Voiceless	◌ Breathy voiced	◌ Dental
◌ Voiced	◌ Creaky voiced	◌ Apical
◌ Aspirated	◌ Linguolabial	◌ Laminal
◌ More rounded	◌ Labialized	◌ Nasalized
◌ Less rounded	◌ Palatalized	◌ Nasal release
◌ Advanced	◌ Velarized	◌ Lateral release
◌ Retracted	◌ Pharyngealized	◌ No audible release
◌ Centralized	◌ Velarized or pharyngealized	
◌ Mid-centralized	◌ Raised	◌ (ɹ̥ = voiced alveolar fricative)
◌ Syllabic	◌ Lowered	◌ (β̥ = voiced bilabial approximant)
◌ Non-syllabic	◌ Advanced Tongue Root	
◌ Rhoticity	◌ Retracted Tongue Root	

3. コミュニケーション

コミュニケーションとは、ある文脈や状況の中で、知識や思考などの客観的な情報や、感情などの主観的な情報を伝達することである。伝達の際の情報の送り手と受け手の間の媒体には、言語によるものと非言語によるものがあり、それぞれ音声を伴う場合と伴わない場合とがある。

言語 (verbal) によるコミュニケーション

音声による場合：話しことば

音声によらない場合：書きことば

非言語 (non-verbal) によるコミュニケーション

音声による場合：プロソディ (リズム, イントネーション, 声の高低・大小など)

音声によらない場合：ボディ・ランゲージ (表情, ジェスチャー等)
会話の際の相手との距離等

次の会話を考えてみよう。

A: Is this a book?

B: No. It's a box of candies.

文字だけを見ると、中学校 1 年の英語に登場する簡単な文型であるが、これが音声を伴うコミュニケーションの場面ではどうなるであろう。例えば、郵便局でチョコレートを一箱送ろうとしている人が、局員からそれが本なのかどうかを尋ねられている状況だとすると、それに応じた〈表情〉が話し方に現れてくるであろう。もし、A が箱の中身について疑いの気持ちをもって尋ねている状況なら、また違った声の表情がでてくるであろう。このように、コミュニケーションにおける送り手の意図と受け手の解釈は、状況や文脈との関係で成立するものである。

今までの日本の英語教育では、文字言語の学習が中心であった。しかし、これからの国際化に向けて、音声面の十分な英語運用能力の育成が必要である。また、英文をただ機械的に日本語に置き換えたり、英語をただ声に出してというだけでは、実際の言語使用の場面では不十分である。

ある言語を用いてコミュニケーションができるということには、いろいろな能力が関わっているのである。その言語の文法や語彙・音声・綴りの正しいルールを適用する「文法能力」(grammatical competence) だけでは、真の「コミュニケーション能力」(communicative competence) が備わっているとはいえないのである。コミュニケーションには、さらに次のような能力も必要である。

- (1) 社会言語能力 (sociolinguistic competence): 文脈に応じて適切な話題を選択し、それを的確な言い方で表現できる能力。例えば、命令・約束・指図などの様々な種類の発話行為を、メッセージの受け手に応じて使いわける言語機能。
- (2) 談話能力 (discourse competence): パラグラフや文章・会話・対談などの一つのまとまった意味単位の伝達に関わるもので、これらの伝達行為を、一貫性のあるものとしての確に構成したり展開・継続させる能力。
- (3) 方略能力 (strategic competence): 発話行為を効果的に行うための能力。例えば、前述の三つの能力 (文法能力・社会言語能力・談話能力) の不備を補うための能力。

話し手はこれらの能力を使って発話し、それを受け取る聞き手は、メッセージの意味内容を状況に応じて解釈しているのである。

4. 音声言語と文字言語

人間の〈話しことば (speech)〉の誕生は「自然界の音」の人間による模倣に由来するという説があったり、痛みや怒り、笑いなどの感情表現から始まったとも考えられている。音声言語が文字言語より先行していることは明らかであり、文字は、音声を記録するための道具として登場したといえる。子供がまず最初に音声を覚え、それを土台として文字に入ることからも明らかのように、ことばの誕生においてだけでなく、人間がコミュニケーションの手段としてことばを習得していく段階についても、同様のことがいえるのである。

話しことばと書きことばの基本的な違いは、表2のようにまとめることが

できる。まず、書きことばでは、静的・永久的なもので、そのメッセージの受け手は目の前にいないことが普通である。推敲し書き直す余裕もあるため、話しことばよりも簡潔で正確な文や、複雑な構文・語彙を用いる傾向がある。そして、大抵の場合、自分のもつ言語的諸能力を使って、距離と時間を越えて情報や知識や技術を記録し、伝達することができるのが書きことばの主要な特徴である。

一方、話しことばは時間的に拘束され、動的・瞬間的なもので、メッセージの送り手(話し手)と受け手(聞き手)が同一の場面を共有することが普通である。このため、両者の相互作用の中で、身ぶりや表情がメッセージの一部として働くこともある。受け手の反応を見ながら伝達内容を修正したり、中断することができたり、同じことばの繰り返しや口ごもりなども現れる。ことばの理解には、言外の意味内容が含まれることがあるが、特に話しことばの発話内容の解釈には、ことば以外の要素が付加する情報の度合いが大きいといえる。

表 2 基本的形態における音声言語と文字言語の比較

	音声言語	文字言語
(1) 特質	動的・瞬時的	静的・永久的
(2) 習得順序	先	後
(3) コミュニケーションの際の インタラクションの度合	高い	低い
(4) 語彙・構文	平易	複雑
(5) 通時的变化	流動的	固定的
(6) 言語内のバリエーション	多い	少ない

5. 言語とメディア

最も基本的な人間の言語によるコミュニケーション活動は、人と人が直接会って話をするという形で行われるものであるとされている。この場合のコミュニケーションはその場限りの一過性のもので、そこに参加している者

だけがその内容を共有し得るものである。従って、このような基本的な形態の言語コミュニケーションでは、情報の伝達や記録は限られた範囲でしか行うことができない。そこで、より高度なコミュニケーションを行うための方法として、新聞や電話、ラジオ、テレビなどの情報メディアが作り出されてきた。現代では、これらのメディアを用いて、文字だけではなく、音声や画像を伴うコミュニケーションが可能となっている。また、最近ではコンピュータ上でこれらのメディアを扱う「マルチメディア」が実現されてきている。

このようなコンピュータを中心とした情報通信技術の発達は、全く新しいメディアによるコミュニケーションを可能にしてきている。例えば、世界中のコンピュータ通信網としてのインターネットは、電子メールなどによるリアルタイムの情報交換を可能にしており、WWW (World Wide Web) の数々のサイトは、あらゆるテーマに関連する情報を日夜提供し、文字だけでなく音声や映像なども伴って、さまざまな形で遠隔地間のコミュニケーションを可能にする環境が実現されてきている。また、インターネットのようなネットワーク系メディアとは別に、CD-ROM や DVD (Digital Video Disc) などのパッケージ系のニューメディアの発達もめざましく、教育や娯楽などの分野では、さまざまなタイトル (ソフトウェア) が作られ、パーソナルコンピュータを用いて英語の学習ができるようになってきている。

インターネットに代表されるように、最近のメディアは、テレビ・新聞・手紙・電話・ラジオなどがデジタルデータとしてコンピュータ上で一元化する方向に進んでおり、今後は学校でも家庭でも、情報メディアの出入口はコンピュータという時代になっていくであろう。そのような時代には、国境を越えて双方向のコミュニケーションが行われ、さまざまな情報が英語で入ってくるので、英語学習の重要性がこれまで以上に高まるといえる。このようにグローバルな規模でメディアが発達すると、従来は入手が困難であったオーセンティックな英語が教材として簡単に入手できるようになり、効果的に英語学習を進めることが可能になる。国際化といわれながらも、日本では日常的に外国人と英語でコミュニケーションをする機会がまだまだ少ない。折角このような便利な時代になってきているのであるから、これらのメディアを英語の学習に効果的に利用したいものである。